

## 絹姫サーモンの安定生産に向けて

内水面漁業研究所 冷水魚養殖グループ

愛知県の奥三河地区では、ブランド魚である絹姫サーモン（全雌）の生産が行われています(図1)。絹姫サーモンは無斑ニジマスを雌親、アマゴを雄親としていますが、アマゴはニジマスに比べて成熟が早く、ニジマスの卵を取る時期には成熟のピークを過ぎていて死んでしまうことがあります。また、絹姫サーモンはすべて人為的に雌にするため、雄親には雌を雄に変えたアマゴ(以下、偽雄アマゴ)を用いますが、通常の雄のように腹部を圧迫しても精子が採れないこともあり、安定生産に向けた課題となっていました。



図1 絹姫サーモン

アマゴは、日照時間が短くなると成熟が進むことが知られています。そこで、当グループでは偽雄アマゴに対して電照で成熟を遅らせる試験を行いました。

電照を行わない無処理区、夏至から日照時間が短くならないように電照を開始し、採卵日の3週間前に電照を切る3週前区、5週間前に電照を切る5週前区の3つを設定し(図2)、採卵日に各区の生残状況、腹部圧迫により精子が採れるかを調べました。

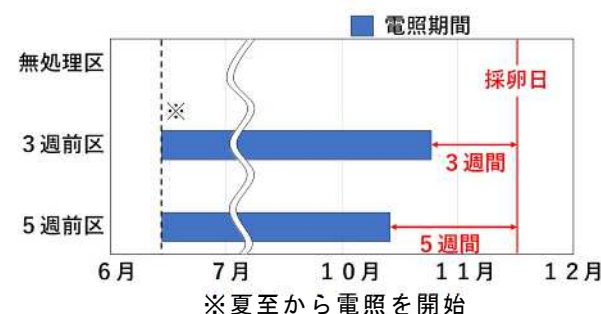


図2 各区における電照期間

その結果、無処理区は成熟のピークが過ぎて約半数が死んでしまいましたが、電照した両区ではすべて生き残りました(図3)。また、腹部圧迫により精子が採れた個体の割合は、無処理区および3週前区で0%でしたが、5週前区で88%でした(図3)。

今回の試験で、通常の雄アマゴと同様に偽雄アマゴに対しても電照による成熟のコントロールが有効であり、採卵日の5週間前に電照を停止すると良いことがわかりました。また、電照によって、ベストな時期に採精することで、効率的に精子が採れることも明らかとなりました。

この方法により、安定した絹姫サーモンの生産につながると考えています。

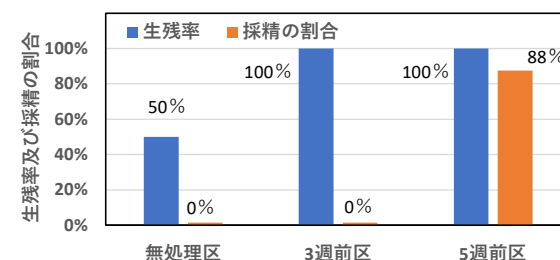


図3 各区のへい死率及び腹部の圧迫で精子が採れた個体割合

## イワシ類長期予報（令和7年1～6月）が発表されました！

漁業生産研究所 海洋資源グループ

12月24日に国立研究開発法人水産研究・教育機構から発表された長期予報のうち、本県の船びき網漁業が、当期に多く漁獲するシラス類に関する予報は以下のとおりです。

([https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2024/fri\\_20241224\\_ukiyo-pac-2nd.html](https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2024/fri_20241224_ukiyo-pac-2nd.html))。

## 1 海況

黒潮流路：A型基調で推移する(図4)。

沿岸水温：遠州灘は「平年並み」～「高め」で、暖水波及時に「極めて高め」で推移する。

## 2 シラス類

マイワシシラス：漁獲量は前年並み。産卵親魚の来遊は少なく、漁獲の急増は見込めない。

カタクチイワシシラス：漁獲量は前年並み。

当期のシラス漁場は、主に渥美半島沿岸に形成され、シラスは、黒潮からの暖水波及に乗って来遊します。暖水波及の動向は、黒潮本流が南下後に北に向かう流れが接岸する位置に左右され、御前崎付近に接岸すると漁場ができやすい傾向にあります(図4)。

令和7年も、大蛇行(A型流路)が継続する予報であり、北上流に伴う暖水波及次第では漁場形成が期待できます。また、渥美半島沿岸では、伊勢・三河湾に来遊したカタクチイワシの親魚由来の卵やシラスが、外海に流され、漁場を形成する場合もあり、内湾の来遊親魚保護により、カタクチイワシシラスの漁獲量増が期待できます。



図4 黒潮流路A型の事例

## 今年はどうかな？アサリの資源調査

漁業生産研究所 栽培漁業グループ

県内主要漁場である一色干潟周辺の海域で、アサリの資源量を把握するために調査を行っています。令和6年10月の調査では、天然発生した個体群や、豊川河口周辺の稚貝場から移植されたと考えられる個体群を合わせて、10,897トンとなり、前年同時期(令和5年10月)の6,189トンを上回る資源量と推定されました(図5)。

このアサリが今年の順調な漁獲につながり、皆さんの食卓に美味しいアサリが並ぶことを期待しています。

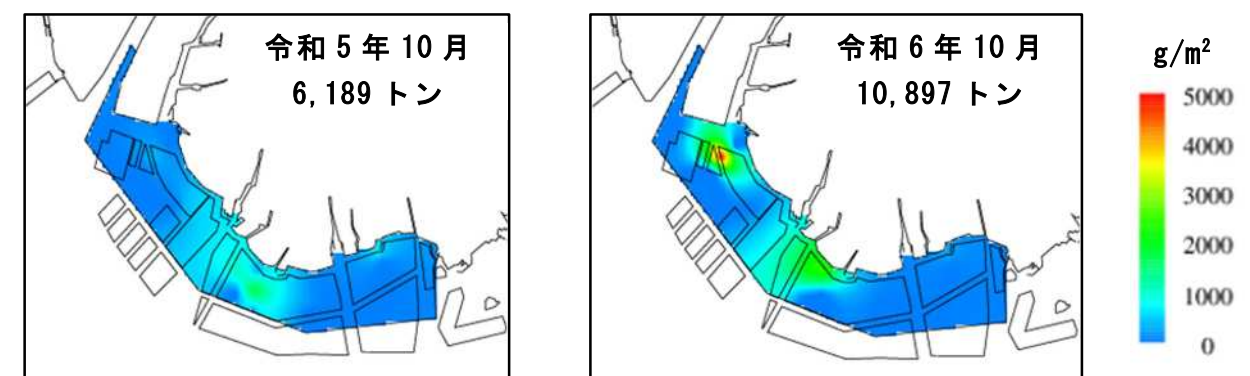


図5 調査海域におけるアサリ現存量 (g/m²)

